⑵　体型に関する改良目標

強健で肢蹄が強く、体積に富み、後躯が充実し、体各部の均称のとれたものとする。

⑶　能力向上に資する取組

①　改良手法

血統登録情報を活用した近親交配の回避及び不良形質の排除や、スクレイピー抵抗性遺伝子の保有率の向上に配慮した交配に努めるものとする。

また、客観的な能力評価手法の活用に向けた取組を推進するとともに、そのデータ収集に努めながら、優良な種畜を選抜・育成するための改良手法への応用についても検討を進めるものとする。

②　優良な種畜の確保

純粋種の減少及び種畜の不足が危惧されていることから、関係機関や飼養農家の協力の下で、優良な種畜の供給体制づくりを推進するものとする。

③　人工授精技術の活用

効率的な改良・増殖を進めるため、家畜人工授精師の育成等を通じた人工授精技術の向上を図るとともに、人工授精技術の活用により優良種畜の広域的な利用に努めるものとする。

④　飼養・衛生管理

ア　飼養及び衛生管理技術の向上を図り、人工ほ乳技術を活用した子羊の損耗防止や分娩前後の母羊の適正な栄養管理等により生産性の向上に努めるものとする。

イ　暑熱対策等の実施のほか、家畜疾病の発生予防及びまん延防止のため、生産者における飼養衛生管理基準の遵守の徹底について指導するものとする。

⑤　多様な利活用に関する情報共有

めん羊の多様な利活用に関する情報の収集・共有を図るとともに、利用目的に応じた優良なめん羊の供給体制づくりを推進するものとする。

3　増殖目標

飼養頭数については、需要動向に応じた頭数となるよう努めるものとする。

（参考）めん羊をめぐる情勢

1　めん羊をめぐる情勢

我が国のめん羊飼養の目的は毛用から毛肉兼用、肉用と変遷し、近年大規模な専業農家も出てきている。羊肉については、その栄養成分（カルニチン等）について注目されている。

飼養頭数は、約1.6万頭（平成25年）であり、羊肉は年間約1.7万トン（平成24年）の需要があるが、そのうち国内生産は約188トンと全体需要の約１％である。

2　これまでの改良の取組

めん羊は、昭和初期まで羊毛生産を目的としてメリノ種をはじめとする多くの品種が海外から導入された。昭和12年にはコリデール種が全体の７割以上を占めるに至り、主要な品種となり、体格や羊毛の改良に重点が置かれた。

昭和30年代以降は肉用としての生産が主となり、昭和40年代にはサフォーク種の飼養が中心となった。不良形質の排除や飼養環境の改善、米国やカナダを始めとした海外からの種畜導入等により、大型化が図られた。

これらの結果、産肉能力及び繁殖能力の向上が図られ、離乳時体重は年々増加し、離乳時期が早期化している。

近年では、スクレイピー病清浄国であるニュージーランドから主に種畜導入が行われ、スクレイピー抵抗性遺伝子の保有率に配慮した種畜生産が進められている。

Ⅶ　山羊

1　改良・増殖をめぐる現状と課題

山羊は、乳利用を目的として主に日本ザーネン種が飼養されている。また、沖縄等では肉用としての利用がされており、大型化及び産肉能力の向上を目的として在来種と日本ザーネン種、ボア種等の交雑利用も行われている。

近年では、チーズ等の乳製品加工・販売の取組がみられることから、更なる泌乳能力の向上が求められている。

また、畜産物利用だけでなく、高い放牧適性をいかした耕作放棄地の有効活用や景観保全への活用、小型で扱いやすい特性をいかした、ふれあいによる安らぎや癒やし効果の発揮や教育への活用、地域特産品づくり等の多様な利活用も行われている。このため、飼養及び衛生管理技術の向上を図るための情報提供等が重要となっている。

一方、血統登録頭数の減少に伴い、優良純粋種の維持・確保も課題となっており、優良な種畜の広域的な利用に向けた情報の共有や利用目的に応じた種畜供給を推進する必要がある。

2　改良目標

⑴　能力に関する改良目標

生産物の需要に応えるため、斉一化に重点を置き、安定した生産体制づくりに努めるとともに、生産コストの低減を図るため、繁殖能力の向上とともに、乳用にあっては山羊乳、乳製品の需要に対応するため泌乳能力の向上に努め、肉用にあっては産肉能力の向上に努めるものとする。

また、草類に対する食性の幅が広く、牛やめん羊が好まない雑草等も採食するなどの採食特性をいかしつつ、地域での山羊の多様な利用を図るものとする。

①　繁殖能力

受胎率の向上に努めるとともに、肉用にあっては、更にほ育能力等の向上に努めるものとする。

②　泌乳能力

ザーネン種等の乳用にあっては、乳量の向上に努めるとともに、乳成分の維持・向上に努めるものとする。

表：能力に関する目標数値

	総乳量（250日換算）
現　在	468kg
目　標 （平成37年度）	600kg

注１：ザーネン種のものである。

注２：総乳量は、産次、分娩後日数、１日当たり乳量を基に、泌乳期間を250日換算して算出したものである。

③　産肉能力

ボア種等の肉用にあっては、発育性、増体性及び枝肉歩留りの向上に努めるものとする。

⑵　体型に関する改良目標

①　強健で肢蹄が強く、体各部の均称のとれた飼養管理が容易な大きさのものとする。

②　乳用にあっては、乳器に優れ、搾乳が容易な体型のものとする。肉用にあっては、体積に富み後躯が充実したものとする。

⑶　能力向上に資する取組

①　改良手法

ア　血統登録情報を活用した近親交配の回避と間性（注）等の不良形質の排除に配慮した交配に努めるものとする。